

知っているようで知らない精華町
その魅力を再発見するタブロイド。



とうとうと流れる木津川と、神々が宿る
神奈備とも呼ばれた丘陵にはさまれた
精華町は、昔から、京の都と南都を結ぶ交
通や軍事、通商上の重要な地域として、し
ばしば歴史に登場します。

初めて文献上に登場するのは、日本最
古の歴史書と言われる『古事記』や『日本
書紀』です。古墳時代前期に起きた戦乱に
関する記述で「波布理曾能」つまり現在の
「祝園」の地名が現れるのです。

みづける

seika



祝園神社

古墳時代前期、木津川流域や大和盆地の有力首長や王が支配権をめぐって激しく戦いました。伝承によると、武埴安彦（建波爾安王）も反乱を企てますが、倭国の朝廷の軍勢の前に討たれてしまいました。鬼神となった武埴安彦の魂を鎮めるために始まったのが、京都府指定無形民俗文化財でもある祝園の「居籠祭」と伝わります。混沌の歴史で幕を開けた祝園ですが、藤原氏が隆盛を誇った平安時代には、都から春日詣に至る途上の休憩地として天皇や多くの貴族が立ち寄りしました。

そして、錦織りなす秋の美しさと同様に、祝園（波々曾乃毛利柞之杜、柞ノ森）は紅葉の歌枕になりました。『小倉百人一首』の撰者としても知られる著名な歌人・藤原定家も、「本津川の波さえも嵐に散った紅葉で色づくようだ」と心を酔わせました。数々の物語舞台となった木津川のひとつ。せせらぎに杜の葉擦れの音が重なり、心をいにしえへと誘います。秋の散策、つわものが討ち合う争乱のさわめきや、鳳輦や騎馬が進む華やかな平安絵巻に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



本文はこちらのQRコードから
オンラインでもご覧頂けます。

古代史に 躍り出た 決戦地

現在の精華町、木津川と西方に連なる丘陵の間には数万年前から人々が住み、紀元前3〜2世紀になると稲作も盛んになりました。3〜4世紀には有力な地域の首長も現れ、4世紀後半からは精華町内でも次々と古墳が築かれていきます。古墳時代、現在の奈良盆地や大阪平野で、倭国の首長を中心として有力氏族が連合して成立したのがヤマト王権です。そして、ヤマトに反旗を翻したのが、久須婆（大阪府枚方市樟葉）を拠点にしていた第8代孝元天皇の皇子・建波爾安王でした。

『古事記』によると、第10代崇神天皇の時代、蜂起した建波爾安王が朝廷の軍勢と木津川を挟んで激突したものの、建波爾安王は矢に射られて戦死してしまいます。逃げる敗軍も次々と切り殺された―という説話が「波布理曾能」という地名になったといえます。日本書紀でも、武埴安彦の反乱として同様の逸話があり、「羽振苑」という地名の由来が語られています。日本書紀では古い時代の物語として描かれていますが、実際には4世紀末ごろの出来事とされています。

非業の死を遂げた武埴安彦の亡魂は鬼神となり、この地にとどまりました。悩んだ人々は春日大明神を勧請して社を建て、神事を執行して鎮魂しました。これが祝園神社。そして「居籠祭」の始まりといえます。

貴族が愛した 秋の景勝地

時代は下がって、平安・鎌倉時代。祝園は再び、史料に頻りに登場します。春日参詣の中継地として貴族たちの日記に綴られ、紅葉の名所として和歌に詠まれるのです。

奈良・平城京の東に位置する春日社は藤原氏の氏神です。10世紀に摂関家・藤原氏の勢力が増すと、平安京から祭使が送られ、貴族も盛んに春日社へ参詣しました。都からの参詣道のひとつが泉河と呼ばれた木津川を舟でさかのぼったり、左岸を徒歩で進んだりするルートです。春日社に加えて、高野山や吉野への参詣も精華町を経由しました。例えば、永保元（1081）年には白河天皇、永長2（1097）年には堀河天皇、天永2（1111）年には少年だった鳥羽天皇も祝園を経由して南都行幸しています。天皇が乗る鳳辇や牛車、騎馬の公卿らが壮麗な列をなし、南都へそして帰路、都を目指しました。祝園の南には食事をする休憩所が設けられ、一行はしばし旅の足を休めました。

貴族たちは特に、木津川の舟旅を愛したようです。

著名な歌人・藤原定家は、建仁2（1200）年の春日詣を詳しく日記に残しています。出仕後に鳥羽から乗船、宇治川あたりで舟をとめてひと眠り。夜明け前から木津川をさかのぼり、泉木津で馬に乗り換え、奈良へ。春日社に参った後は、終夜、木津川を下り帰路についた、とあります。定家は翌年にも摂関家の一行から抜け出し、木津川でのひとときを楽しんでいます。

川面を渡る風に吹かれてのんびりと行く舟旅は創作意欲を大いに刺激したのでしょう。杵、つまりコナラやクヌギなど色づく広葉樹に彩られた祝園一帯は、紅葉の景勝地として歌枕になりました。

時わかぬ浪さへ色にいづみ河
は、その社に風吹らし

季節によって違はずの木津川の波
さえも風に乗った杵の紅葉で色づくよう
だ。というところでしょうか。この歌は『新古今和歌集』に収められています。

新古今和歌集より前に選集された『千載和歌集』にある賀茂成保の歌も秋の見事さを伝えています。

吹きみだる はそが原をみわたせば
色なき風も紅葉しにけり

大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に登場した鎌倉幕府三代将軍・源実朝は、定家に師事した優れた歌人としても知られます。『金槐和歌集』にも、祝園に思いをはせた歌があります。

泉川は、その社になく蝉の
こゑのすめるは夏のかさか

御家人の謀叛や権力争いに心を痛めつつ、京の都の文化や暮らしにあこがれ続けた若將軍が、師の愛した木津川の舟旅への憧れを歌ったのでしょうか。

氏子が誇る 祝園の居籠祭

武埴安彦の魂をなくさぬ、豊作を祈る「居籠祭」は毎年、年明け最初の申の日（申が月3回）の場合は2度目の日（から）3日間営まれます。祭りは1日目、厳かな秘儀「風呂井の儀」で始まります。2日目の「御田の儀」で掲げるのは、1か月ほど前に氏子たちが作った長さ12尺約4m、重さ約100キロの大松明。闇の中、「もうでござい」の音が掛かると集まった参詣者も静粛に、祭場「幸の森」へ向かう松明を見守ります。五穀豊穡を祈る神事後の直会では、トウガラシや豆腐の入った名物の郷土食「豆腐汁」で体を温めるそうです。

3日目は「綱曳の儀」。こどもたちも参加して、わら束を竹皮で巻いた輪に付けた青竹を引き合います。神事が終わると竹は神社南の「出森」まで運び、焚き上げます。ここは武埴安彦が斬られた場所と伝わり、現在でも「武埴安彦破斬跡」という石碑が建っています。

地域の誇りである祭りは、京都府指定無形民俗文化財に指定されています。祝園神社のごもり祭保存会の喜多俊夫会長は「かつては会話はもちろん、できるだけ音をたてずに家に籠り、奉仕しました。遠方からの参詣も多く、今でも手を合わせて松明の火の粉を受けておられる姿に触れると、厳かな気持ちになります。新型コロナウイルス感染症の影響で2年間は神事のみ縮小催行になりましたが、来年こそはと祈りを込めています。



祝園神社のごもり祭保存会
喜多 俊夫 会長（64）

精華町観光ポータルサイトから、まちの魅力をみつけてください！

